

甲子園ホテルについての遠藤新による短い記述をめぐって

A Study on the Short Texts about Koshien Hotel by Arata Endo

黒田智子 武庫川女子大学 教授

Tomoko Kuroda

Professor,
Mukogawa Women's University

はじめに

遠藤新(1889-1951)の設計による甲子園ホテルは、1930(昭和5)年に完成した。敬愛するフランク・ロイド・ライト(1867-1959)の作法と、日本の伝統的文化・建築との調和に取り組んだ力作である。新聞や雑誌で注目され、自らも完成を喜び、師ライトへも出来映えを報告した。ところが、甲子園ホテルについて、遠藤が自らの考えを語る文章は意外なほど少ない。竣工の年に発表された「甲子園ホテル」¹⁾(1930)、「甲子園ホテルについて」²⁾(1930)、4年後の「椅子・テーブル」³⁾(1934)、最後が「甲子園ホテルの場合」⁴⁾(1936)で、いずれも作品の一面を断片的に記した短文である。

遠藤が、完成間もない東京駅(1914)を5日間にわたる新聞連載で批判したのは、大学卒業直後であった。その後も、建築界に活字による議論を何度も仕掛けてきたほどの文章力があった。その気になれば、甲子園ホテルについてのまとまった記述を残すことは十分可能だったと思われる。少なくとも、ライトが著し遠藤が翻訳した「新帝国ホテルと建築家の使命」⁵⁾(1922)にならって、甲子園ホテルの建築的な意義や設計意図について書けたのではないかと思う。

したがって、遠藤の記述が、かなり断片的であることの背景には、そうなるだけの理由があったととらえることができるだろう。そして、それらの記述が書かれた背景と考え合わせるなら、むしろ短いがゆえに、遠藤自身の考えの端的な表れとして読み解くことが期待できるのではないだろうか。

1. 記述の内容

1-1 甲子園ホテルにおける理想的な生活

遠藤自らが筆をとった四つの記述の中で最も長いのは、竣工の年の「甲子園ホテルについて」である。まったく同時期発表の「甲子園ホテル」では、外観や内部空間を写真で紹介し、極めて簡潔に短文を添えている。しかし、「甲子園ホテルについて」では、それらの場面に関して自らの考えや意図を掘り下げてのべているわけではない。常務取締役であり支配人をつとめる林愛作の代わりに、ホテルが形をとるに至った設計の起点に遡っているのである。最初に、「林氏の代弁の恰好で甲子園ホテル設計の生い立ちを顧みることになります。」²⁾と断っている。どんな場合も建築家として筆を取っ

てきた遠藤には、極めて珍しい。そして、林が甲子園ホテルでめざした理想的なホテル生活について、全体の3分の2を割いて紹介している。

それによれば、宿泊客は、日本の旅館のようなサービスを得ることができるという。世界の一流ホテルに通じていた林は、日本の旅館のサービスを世界一と評価するだけの揺るぎない経験をもっていた。しかし、旅館とホテルは日本において別物で、当時の国内ホテルのサービスには改善すべき問題点があった。もちろん、甲子園ホテルでは、行き届いたサービスだけでなく、西洋のホテル同様のプライバシーが確保される。そのために林は、遠藤に設計を依頼する前から、和室と洋室が続き間となった客室の間取りや、他人から直の視線を避けることができるような出入口と廊下の関係について、すでに自らの案をもち雑誌でも発表していた。日本人の住文化にそい、女性や子供にも過ごしやすく、それゆえ家族での宿泊にも適するように考案したものである。もちろん帝国ホテルでは実現されておらず、ホテルとして画期的であった。

一方で遠藤は、甲子園ホテル完成の4年前に「建築論」⁶⁾(1926)を著している。帝国ホテル完成から数えるとわずか3年後である。帝国ホテルの解説やライトの言説の紹介などで偉大な師に形式的に追随するのではなく、自分なりの建築理念と方法を求めて努力を続けていたのだ。その冒頭において、遠藤は、「はじめに用がある。(中略)其れが建築が出来る順序です。用とは、生活の事実としての要求。」⁶⁾と掲げている。その言葉のとおり、「甲子園ホテルについて」では、「ホテル設計の生い立ちを顧み」、ホテルに必要な「用」としてのサービスや、理想的なホテルの「生活」について、理論に対する実践を記しているといえる。

しかし、それは、「林氏の代弁の恰好」であり、建築家である遠藤ではなく支配人である林に、ほぼすべてを負っているかのような書き出しなのである。このことは、「建築論」において、「用は誰が知っていてもよい。建築家とは限らない。寧ろ建築家より知っている人が無いとしない。ただ、知って形を与える所に建築家の仕事がある。従ってまた形を与えることから建築家的に知るといふことにもなって来る。」⁶⁾とする立場と、矛盾するようにみえる。建築家は、まず何よりも生活尊重の立場をとるべきだ。しかし、建築形態と密着した空間構成として、生活行為や必要機能の空間的な配分を

おこなうところに、建築家の職能や役割がある。したがって、それは、「用」や「生活」をよく知っているというだけの理由で、生活者、使用者に任せられるものではない。同様に、林は、ホテル支配人として、経営と一体のサービスや設備がなんであるかを誰よりも良く知り、それゆえに客室の考案までしていた。だからといって林が、甲子園ホテル全体について最も適切な空間構成をおこなえるわけではない、というのが「建築論」に遠藤が示す自らの立場であるはずだ。

そのような空間構成についても「甲子園ホテルについて」では、具体的にのべられている。まず、客室の間取り、廊下との関係、近接するサービススペースなど林からの提示を受けて、その条件を満たす客室を左右対称のふたつの群として東西に配する。それらは、ホールをはじめとするパブリックスペースによってつながれる。その地下には、ボイラー、厨房などを配する。また、ボイラーの煙突は、各階の暖炉とつながり、通風もかねる、などである。ここでは、実感すべき空間の魅力について何ものべられていないが、「建築論」において、「提示された要件の雑然たる堆積の間より一つの系統を看守する。」⁶⁾に対応するであろう。それを建築家として遠藤が主導し判断したと特に述べてはいない。控えめながら「ホテル界の第一人者としての林さんがマネージメントの方向からする研究と併せて附帯設備附帯工事の組織を系統立ててある」⁷⁾とつけ加えていることから伺えるのである。

「甲子園ホテルについて」では、複雑な諸条件に応えながらそれらを満たし一つにまとめる過程で、常に林の要求や判断にそっていたことをのべておきたかったのだろう。その4年後に書かれた「椅子・テーブル」では、甲子園ホテルのために設計した家具について、写真と図面で紹介している。付された文章は、やはりかなり短文であるが、いくつも試作をつくって、林と検討を重ねたと記している。林がもっている建築家に勝る生活感覚と建築家に迫る空間感覚とを、遠藤が非常に尊重していたことが読み取れる。また、そのような施主、使用者、生活者を得てこそ、建築家も力を発揮でき、良い建築が実現すると言いたかったのかも知れない。

1-2 甲子園ホテルのたたずまい

完成から6年後に書かれた「甲子園ホテルの場合」は、建築と庭とが織りなす景観の特徴について述べている。散文詩のような形式で23行におさめ、やはり短文である。しかしながら、唯一、甲子園ホテルの視覚的な魅力に関する特質について語ったものである。ホテル南側全景を、パノラマに引き延ばした写真と一緒に掲載されている。そして、「先づ初めに、建築のたたずまいを考える。」⁴⁾と語り始められる。

生活を第一に考えるという6年前の姿勢とは明らかに異なっている。初めに考えるのは、「生活」ではなく、建築の「たたずまい」なのである。

「たたずまい」を考えるにあたり、遠藤は、次のように続ける。「其所には間取りも姿の方途も敷地も環境も景観もほぼとして所謂漂渺裡に形無くして形をとりつつあるので

す。」⁴⁾つまり、「たたずまい」の構成要素は、生活空間、建築形態、敷地・環境条件であり、それらの間に重要度についての偏りはみられない。具体的には、建築形態として「緑の屋根」の層と2本の「塔」、敷地・環境条件として「松林と水辺」をあげている。生活空間については、特にのべていない。すでに、林愛作の代弁者として6年前にのべたということであろうか。いずれにしても、甲子園ホテルの「たたずまい」は、これらの構成要素から生まれる「建築と庭園の統合」、「建築と環境の統合」として語られている。

理論に対する実践として甲子園ホテルを語るのであれば、先にみた「甲子園ホテルの場合」をより深めるか、あるいは「建築美術」⁷⁾(1927)との対応を記してもよいと思うが、遠藤は、そうはしなかった。「甲子園ホテルの場合」は、むしろその発表の12年前に遡る「住宅小品15種」⁸⁾(1924)に寄せた文章を思い起こさせる。はしがきとして書かれた、やはり散文詩のような形式の短文である。「まづ地所を見る地所が建築を教えて呉れる いかん建築が許されるか いかん生活が許されるか そしていかん生活が展びられるか 其れをその自然から学ぶ。」⁸⁾生活と建築を環境条件において構想する姿勢は変わっていない。

しかし、「地所」を見てそこに示されるものを読み取り学ぼうとした遠藤は、それを「たたずまい」として構想することだととらえるようになった。そして、様々な与条件を同時に満たし、それらをひとつにまとめるために建築家の直感が求める方向を、「たたずまい」という言葉に託している。一般に佇まいには、もののありさまやその雰囲気だけでなく、そこでの暮らし方や生業という意味があるからであろう。また、全体に漢字を多用しながら、あえて「たたずまい」と平仮名表記しており、大和ことばを尊重しているようにみえる。「たたずまい」には、遠藤の関心の変化が読み取れる。

ところで、「住宅小品15種」のはしがきは、独立から1年3ヶ月後に、初めてまとまった住宅作品を『婦人之友』に発表した時に付された。そこには、「神創りたまふ如く我造る」と。自然に参ぜむとするの熱意である。⁸⁾など、建築家としての初心が込められている。「自然に参ぜむ」とは、ライトの有機的建築に倣い、自然界と同じ特質をもつ建築を自らも設計しようとの決意であろう。甲子園ホテルの竣工から6年後に、遠藤を竣工時ではなく、さらに12年前の独立当時に遡り、初心に戻したのは何だったのだろうか。

2. 記述の場としての『婦人之友』

甲子園ホテル竣工にあわせて、『建築と社会』、『新建築』が堂々たる特集を組んでいるが、不思議なことにも遠藤は自ら筆を取ってはいない。自ら残した四つの記述は、すべて『婦人之友』への寄稿であった。

『婦人之友』は、自由学園を設立した羽仁吉一・もと子夫妻が創設した婦人の友社が1906年以来発行してきた月刊誌である。キリスト教精神に基づく女性の啓蒙を目的として、

生活や文化について時代に即応した情報を提供していた。その表紙は、著名な画家によって描かれた絵で飾られていた。

遠藤は、帝国ホテルの現場と同時進行した自由学園でも、設計から竣工まで全面的にライトを支えた。その設計は、遠藤が、来日中のライトに羽仁夫妻を紹介することから実現した。遠藤が東京帝国大学在学中にキリスト教に入信したときから、夫妻は、社会活動や集会等を通じての知己だったのである。ライト来日当時、羽仁夫妻は、学園の名のとおり自立した自由な女性を育てる女子教育の場として、自由学園の開校を計画していた。ライト帰国後、自由学園の拡張に伴う計画と設計は遠藤によって引き継がれた。その活動は、戦中・戦後にまで及ぶ。

そして、ライトとの連名による「自由学園の建築」⁹⁾ (1922) が、『婦人之友』における遠藤にとっての最初の寄稿である。それ以来、自由学園はもとより、その他の設計活動や思索の成果を『婦人之友』に発表することになった。遠藤は、キリスト教への帰依と師ライトとの関わりを通じて、自由学園という継続的な建築活動の場を得たのだ。そして、まったく同様に『婦人之友』という継続的な執筆活動の場を得たといえる。社会に対して正面から批判を続けた遠藤にとって、非常に大切な思索のホームグラウンドでもあったと思われる。それは、女性の啓蒙という基本的な目標にむけて、生活、文化、倫理的視点から、建築家としての信条を発表する場であった。同時に、折々の気持ちを込めて、気負わず自由に自らの考えを発表できる場でもあった。甲子園ホテルについて遠藤が残した短い記述も、そのように寄稿されたと思う。

3. 記述の時期

3-1 渡満と満州中央銀行の仕事

甲子園ホテル完成から、「甲子園ホテルの場合」の発表には6年という時間が経過している。この時差は何によるものなのだろうか。遠藤の活動を追ってみたい。

先ず、1933年、満州の首都新京（現・長春）にも遠藤新建築創作所の支所を開設し、そこを拠点に、建国間もない満州でも設計活動を展開するようになった。甲子園ホテル竣工の3年後、満州事変勃発の翌年である。そして満州中央銀行の総裁邸から一般社員住宅まで社宅群（1934）を一手に引き受け、早くも支所開設の翌年に竣工している。続く1935年が、自信作である満州中央銀行倶楽部（以下中銀倶楽部）の完成である。当時の満州では、ほとんどの建築家が行政組織の下で活動していた。民間の建築家としては、異色の活躍ぶりであることが注目される。

ところで、遠藤は、完全に拠点を新京に移した訳ではない。日本と満州を行き来し、「甲子園ホテルの場合」を寄稿する1936年までに、自由学園については、新キャンパスの計画をおこない、校舎、講堂、寮などを次々に設計している。同時に、住宅を始め、学校、旅館などを並行して手がけている。

甲子園ホテル完成後は、多忙な日々だったことが想像される。そのせいか、1931年から1934年までの著述はあまり見あたらない。『婦人之友』への発表さえ数える程で、甲子園ホテルについての記述のひとつである「椅子・テーブル」は、そのうちの希少なひとつでもあるのだ。

渡満の前後に、遠藤の関心は、気候風土をはじめ日本とは設計条件が異なる満州の地に、どのような方法でふさわしい建築を実現するかに向けられていたと思われる。だからこそ、「甲子園ホテルの場合」では、白砂青松の極めて日本的な景観を振り返り、建築との調和を述べておきたかったのかもしれない。それはなぜ、1936年の発表となったのだろうか。

中銀倶楽部が完成した1935年、『婦人之友』に、「熱河、北京を建築的に観る」¹⁰⁾を寄稿するだけでなく、『建築知識』において「新日本建築を語る会」¹¹⁾、「満州の新建築を語る会」¹²⁾などの座談会に参加している。満州の建築については、女性の啓蒙よりも建築界での議論の場に重点を置いた姿勢がみてとれる。翌年は、満州の地に完成した中銀倶楽部について『建築知識』に発表している¹³⁾。ただし、これは、写真と図面による簡単な作品紹介にとどまる。

遠藤が、中銀倶楽部の設計意図を論じたのは、『婦人之友』に発表した「煉瓦に聴く」¹⁴⁾ (1940) と、『満州建築雑誌』に発表した「中銀倶楽部の構想—煉瓦に聴く」¹⁵⁾ (1942) においてである。そして、それらが書かれた時期が注目される。それぞれ竣工の5年後と7年後で、やはり記述に時差があるのだ。前者が、骨子を覚え書き的に記述しているのに対して、後者は、その内容を踏まえながら質・量共により充実した内容となっている。

特に1942年は、満州国建国十周年にあたり、その記念祝賀が満州各地で開催された。遠藤は、「中銀倶楽部の構想—煉瓦に聴く」の中で、「今年の春丁度十周年慶祝の機会に増築の機運が熟して残されたる敷地の予定地に大宴会場を建てることになったのです。」¹⁶⁾と、中銀倶楽部の増築が決定した喜びを記している。渡満以来追求してきた満州における建築の在り方について、自らの設計の姿勢や苦心・工夫など思うところを振り返って整理し、少なくとも満州建築界に向けて記述する機会としたと思われる。

では、「甲子園ホテルの場合」を寄稿した年は、どうだったのだろうか。それは、甲子園ホテルではなく、帝国ホテル増築問題が取沙汰された年であった。

3-2 帝国ホテルの増築問題

1936年、4年後の次期オリンピック招致国に日本が選ばれ、帝国ホテル側は、増築でその気運に乗じる思惑であった。遠藤は、「帝国ホテルの増築に就いて」¹⁷⁾を『建築知識』に、「ホテルの増築」¹⁸⁾を『新建築』に発表している。その増築は、満州の建築と同様、遠藤にとって建築界に提起すべき問題であったのだ。「中銀倶楽部の構想」とほぼ同じくらいの長さで、かなり力を入れたことが推察される。

しかし、当時、ライトや遠藤に増築を依頼する人脈は絶え

ていたといつてよい。特に、施主側にあつてライトに設計を依頼した林愛作は、ライトが日本を去るより前に、帝国ホテル支配人を辞任していた。遠藤は、帝国ホテルが、ライトの設計意図を理解しない人々によって増築され、その建築的価値が損なわれることに激しい危機感をもったに違いない。

そのような状況の中で、帝国ホテルの増築について論じることは、遠藤にとって、ふたつの機会とならざるを得なかったと思う。ひとつは、師ライトとの絆の証である帝国ホテルについて、弟子としてのとらえ方を再考する機会である。帝国ホテルの経験がなければ、甲子園ホテルはなかった。その再考には、自らの甲子園ホテルについてよりも、より根本的な思索を要求されたと思われる。

もうひとつは、日本の国と文化を代表する建築として帝国ホテルの意味を再考する機会である。結局 1940 年のオリンピックは、計画に終わった。しかし、1964 年に実現した東京オリンピックによるホテル建設ブームまで、帝国ホテルは、日本を代表するホテルとして世界の著名人を迎えてきた。遠藤は、そのようなホテルの設計に学生時代から夢を描き卒業設計もホテルを選んでいる。したがって、帝国ホテルの再考は、遠藤にとって、建築への姿勢を根本から自らに問いただすことだったのでないだろうか。

それは、同時に、林のホテル観について再考することでもあったと思う。学生時代の旧帝国ホテル見学をきっかけに遠藤と林の交流が始まり、ライトとの出会いに繋がった。林は、以前に勤めたニューヨークの山中商会で、世界の美術愛好家を相手に日本や中国の国宝・重文級の書画骨董品を扱っていた。そこで審美眼を培うだけでなく、欧米の社交やホテルに精通した国際感覚が、帝国ホテルからの招聘理由だった。1914 年の設計依頼はもとより、サービスの質や、空間の美的水準に関しても、施主側に林がいなければライトの帝国ホテルは存在しなかったのではないだろうか。まったく同様に、林がいなければ、遠藤の甲子園ホテルは存在しなかったのだ。

3-3 ライトからの手紙

前述のように、甲子園ホテルの完成と同時に遠藤は、尊敬してやまない師ライトに感謝と喜びを込めてその報告をしている。そして、すぐにライトからの返事を受け取るのである。建築の評価に対して厳しかったライトだが、甲子園ホテルの設計の労をねぎらい、まずはその出来映えを褒めている。

しかし、手紙の内容はそれだけには留まらなかった。甲子園ホテルを「小帝国ホテル」とよび、帝国ホテルにおける自らの「やりすぎ」が、甲子園ホテルにおいてもみられると指摘しているのである¹⁹⁾。「小帝国ホテル」に、帝国ホテルを抜け出すために重ねた遠藤の努力は不十分とするライトの評価が伺える。また、「やりすぎ」の対象は、「機能と関係ない見た目の効果」¹⁹⁾つまり、付加的な装飾を指すと思われる。そのような装飾の否定を掲げたモダニズムが 1920 年代以降、欧米と日本での新潮流だった。一方、ライトは、まさに装飾的な帝国ホテルを設計した建築家なのである。ライトの手紙

から遠藤が受けた衝撃は、国内外の建築界の当時の状況を考え合わせて考察する必要がある。

一方 1934 年、林の辞任により甲子園ホテルの経営方針は変わる。遠藤は、他の案件で多忙な中に、林と共にした甲子園ホテル設計の日々を惜しみながら「椅子・テーブル」を寄稿したと想像される。

そして、1936 年、先に見たライトと林と遠藤抜きで帝国ホテル増築問題を迎えたのだった。

むすび

甲子園ホテルについての遠藤自身による記述は少ない。しかしながら、建築家として自らの姿勢をただし、自ら著した建築論の実践の証として、真摯な思いをこめて書かれたものだと思う。また、ライト、林、帝国ホテル、甲子園ホテル各々の状況に対して、その都度、建築家としての使命感から筆がとられた。竣工年、ライトによる甲子園ホテル評価は、賞賛は惜しまないが欠点も含めて帝国ホテルの範疇を出ないというものだった。このことは、遠藤の甲子園ホテルについての記述が、帝国ホテルとは異なる局面に極端に特化し、結果として断片的になった要因のひとつではないか。一方、帝国ホテルの増築問題に際し、遠藤は、帝国ホテルの成り立ちを、日本を代表するホテル建築として包括的に語っている。そこには、遠藤が、甲子園ホテルもまた備えるべきだと考えた建築的条件を読み取ることができるのではないだろうか。

注および参考文献

- 1)遠藤新: 婦人之友, 婦人之友社, 24, 6, 頁番号なし, 1930
- 2)遠藤新: 同前, 31-32
- 3)遠藤新: 婦人之友, 婦人之友社, 28, 9, 142, 1934
- 4)遠藤新: 婦人之友, 婦人之友社, 30, 9, 頁番号なし, 1936
- 5) F・L・ライト: 新帝国ホテルと建築家の使命, 科学知識, 科学知識普及会, 4, 1922
- 6)遠藤新: 建築論, アルス建築大講座, アルス, 7, 3, 1926
- 7)遠藤新: 建築美術, アルス建築大講座, アルス, 下, 1927
- 8)遠藤新: 婦人之友, 婦人之友社, 18, 5, 2-3, 1924
- 9)F・L・ライト, 遠藤新: 自由学園の建築, 婦人之友, 婦人之友社, 16, 6, 1922
- 10)遠藤新: 婦人之友, 婦人之友社, 25, 9, 頁番号なし, 1935
- 11)遠藤新: 建築知識, 建築知識社, 1, 4, 29-48, 1935
- 12)遠藤新: 建築知識, 建築知識社, 1, 5, 22-31, 1935
- 13)遠藤新: 建築知識, 建築知識社, 2, 6, 12, 1936
- 14)遠藤新: 婦人之友 34, 5, 74-75, 婦人之友社, 1940
- 15)遠藤新: 満州建築雑誌 22, 10, 30-34, 1942
- 16)遠藤新: 同前, 34
- 17)遠藤新: 建築知識, 建築知識社, 8, 35-39, 1936
- 18)遠藤新: ホテルの増築, 新建築, 新建築社, 12, 7, 1936
- 19)遠藤陶: 福島建設工業新聞, 1994 年 12 月 14 日, 遠藤新物語